

香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.8 令和元年11月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151~1154
Fax 087-832-1155
<http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 就任及び退任のご挨拶..... 1
2. 第67回中国・四国地区大学教育研究会報告..... 4
3. よりよい授業のためのFDワークショップ報告..... 9
4. FDスキルアップ講座報告..... 11

1. 就任及び退任のご挨拶

教育学部 教授 宮 崎 英 一



令和元年 10 月 1 日付で、前任の林 敏浩教授の後任として大学教育基盤センターICT 教育部長を拝命しました教育学部の宮崎です。専門は ICT を活用した障がい者支援及び ICT の利活用に向けた学校教育現場への支援という 2 本柱で日々過ごしております。

昨今の AI 等の進化に伴い、日常生活に留まらず学校教育現場にも従来の教育現場にはなかった電子黒板や電子教科書等の ICT 環境が当たり前のように導入され始めています。また従来の教育現場では実現不可能であった、生徒の成績データベースによる個人の習熟度に応じたビックデータの活用等の新しい取り組みが現実として来ています。

これらの ICT 環境の社会変化に対し、文系、理系等の学部を問わず香川大学の卒業生が ICT を十分に利活用できる事は、香川大学における DRI 教育においてもより重要視される事に間違いありません。よって、これらの ICT 環境の構築やテクニカルサポートに留まらず、様々な分野で下支えする事も ICT 教育部の一環と思っております。まず、そのためには現在の ICT 教育部の仕事を停滞なく進めていく事が必要不可欠です。

ただ何分にも年度の途中で参りましたので、自分自身のスタートが遅れている事は間違いありません。前任者の林教授をはじめ事務方の皆様よりいろいろとお知恵をかりながら進めていければと思っております。お手数をおかけする事が多いかと思いますが、宜しくお願い致します。

創造工学部 教授 鶴 町 徳 昭



前任の石井先生の後を引き継いで大学基盤教育センター創造教育推進部門の部門長を令和 1 年 10 月 1 日付けで仰せつかりました鶴町徳昭と申します。創造工学部先端材料科学領域に所属しており、専門は光物性物理学・非線形量子光学です。最近では微小共振器中の光と物質の相互作用、特に超強結合状態と呼ばれる新たな量子状態における超高速遷移ダイナミクスに関する研究、および THz 帯のメタマテリアルという自然界にはない特異な電磁的性質を有する人工物質における共振器量子電磁力学的効果や非線形光学効果に関する研究を行っております。講義は学部においては力学や量子力学、光学などといった物理系の科目を担当しております。また、全学共通においては特に共通教育スタンダードの「広範な人文・社会・自然に関する

知識」の涵養のために文系学生向けの科目である「自然科学基礎実験」の立ち上げに携わり、授業も担当させていただいております。現在は「学問への扉」実施部長も仰せつかっております。

さて、「創造教育推進部門」は平成30年9月5日に設置され、大学教育基盤センター内の能力開発部、地域教育部、ICT教育部を統括的にコーディネートし、本学の教育目標の柱として掲げている、新たな価値創造のための学士課程教育「DRI教育」を、学部の垣根を超えて全学的に波及・展開させることがミッションでございます。具体的には

- (1)DRI 能力を育成するための基盤的教育
- (2)より高度な要望に応えるためのネクストプログラム（特別教育プログラム）
- (3)DRI 能力を育成するためのFDプログラム

の3つの取り組みがメインとなります。これらの責任者である部門長とは非常に重要かつ重い役目であり、私ごときに務まるのか甚だ不安ではございますが、工学部時代の学部選出全学共通教育コーディネータ時に全学共通教育改革に携わらせていただいたことや創造工学部設立前年度の工学部教務委員長として時間割作成の任に当たらせていただいた経験などを活かし、本職の遂行に邁進していきたいと思っております。皆様ご指導ご鞭撻ご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。

創造工学部 教授 林 敏 浩



学内の役職変更に伴い、本年9月末をもちまして ICT 教育部長を退任することになりました。ICT 教育部の立ち上げ時からずっと部長を続けておりましたが、教育学部の宮崎英一教授に ICT 教育部長をバトンタッチしました。

ICT 教育部は他の部会と異なり、様々な問題や案件に対して、対面会議を実施しない代わりにメーリングリストを用いてどんどん逐次処理する部会運営方式を採ってきました。そのため、部会の先生方も顔をほとんどあわさないという何とも変わったスタイルの部会になってしまいました。ある意味、迅速対応という錦の旗のもと、好き勝手にやらせていただいたのかなとも思っています。数が多すぎるのでお名前を挙げることは控えさせていただきますが、好き勝手を許していただいた皆様、そして、そんな私を暖かく見守っていただいた皆様にこの場を借りて感謝の気持ちを表したいと思います。本当にありがとうございました。

なお、部長職を退任しましたが、一委員として ICT 教育部に残ります。これまでの部長職時代のノウハウを活かして宮崎部長をサポートできればと思います。退任の挨拶に似合わない締め言葉になりますが、今後ともよろしく申し上げます。



この度、創造教育推進部門長を退任することになりました。本部門の役割は、本学における教育の柱である DRI 教育を全学に展開させることにあります。同時に大教センターでは、共通教育スタンダードの課題解決能力をさらに徹底させるために、主題科目 B の見直しを進めており、大学執行部や教育戦略室と連携しながら DRI 教育の波及に努めてまいりました。平成 31 年 4 月には「初めて学ぶ DRI」を全学共通科目として新たに開講し、7 月には全ての学部において「本学における DRI 教育」に関する FD を開催してまいりました。更に令和 2 年度からは新しいネクストプログラム「DRI イノベーター養成プログラム」の開講を目指し、現在準備を進めています。他大学を見ても、多くの大学でデータサイエンスに取り組み、一部の大学ではデザイン思考も取り入れられてはおりますが、本学のように D と R と I を融合させ、大学の教育の柱として位置づけている大学は他に例がなく、本学の取り組みは文科省からも高く評価を受けているところです。今年 7 月には総合教育棟「(通称) DRI 棟」も完成し、開所式では国や地方自治体、県内企業に本学の教育方針をアピールしました。この間、非常に多くの教職員の皆様のお力添えをいただきましたこと、心から感謝申し上げます。国は、20 年後の 2040 年に、強くたくましく生き抜く力を身に付けてほしいと考えています。DRI 能力はまさにそのための力です。さらに人生 100 年時代を迎え、「(D)誰もが(R)老後を(I)生き活きと」生き抜くことを祈っております。

2. 第 67 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

中国・四国地区大学教育研究会が、令和元年 6 月 8 日、6 月 9 日に開催されました。この研究会は、大学等での教養教育を主題的に扱うもので、今年で 67 回目となります。メインテーマ「教養教育と専門教育の豊かなつながり」のもとで、一日目は基調講演、パネルディスカッション、懇親会が執り行われ、二日目は 7 つの分科会が開かれました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

■基調講演・パネルディスカッション

基調講演は、「基礎 - 専門 - 大学院に至るまでの体系的なカリキュラム構築」（九州大学理事・副学長丸野俊一氏）、「学士の基盤となる能力の育成を目指す共通教育改革」（鹿児島大学高等教育研究開発センター長 伊藤奈賀子氏）の二本で、どちらも所属先教育改革の状況を説明する、という内容でした。前者は「基幹教育」という概念のもとで、初年次から大学院までの仕組みを体系的に組み立てるもので、それぞれの段階で学生が何をすべきかが明確化されている点が印象的でした。後者では、改革によって共通教育センターに専任教員が 41 名所属することになった（改革前は 9 名所属）という話がありました。これは私も驚いたし、周りに座っていた他の本学教員も驚いていました。



後半のパネルディスカッションでは、山口大学の教養教育の特徴について報告がなされた後、基調講演に登壇した 2 名がそれにコメントをする、というやりとりで大部分時間が過ぎていきました。全体を通じて、3 つの大学の事例について詳しく知ることができたのですが、大学の規模や学部構成が違うので、なかなか香川大学の状況と関連付けるのが難しい、というところが率直な感想です。事例報告が、大学教育の本質的な問題と関連付けられ、議論を深めるところまで進んでいけば、より有益なパネルディスカッションになったように思います。（文責：佐藤慶太）



■人文・社会科学分科会

本分科会では、受講学生の「属性」（専門教育の場となる所属学部）や「出口」（卒業後の進路・職業）を意識した教養教育の在り方や意義についてディスカッションをすること

を目的に、前半では四つの事例報告が行われました。第一報告の内田恭彦先生（山口大学経済学部教授）からは「洞察力を高めるための経営学教育の実践」と題して、幅広い人文科学の知見を基盤として本質的な洞察を目指す経済学の授業（労務管理論）の実践が報告されました。続く、第二報告の森野正弘先生（山口大学人文学部教授）からは、「入れ子構造化する〈教養／専門〉」と題して、山口大学人文学部を事例とした、専門科目と教養科目の「豊かなつながり」の可能性と限界についてご説明がありました。そして、第三報告の舘尾尚子先生（広島修道大学人文学部教授）からは、「教員の専門教育のための補助学を活かした教養科目」と題して、崩し字解読演習科目の事例をご紹介いただきました。最後に、第四報告の林透先生（山口大学大学教育センター准教授）が、「文庫本を教材にした人文・社会科学系教養教育科目の実践と展望」と題して、山口大学における導入教育、自校教育の実践事例を解説されました。



後半では、それら四つの事例報告を受けて、質疑応答が行われました。いずれの大学、学部においても教養教育の位置づけ、専門教育との関係について苦慮されていることがよく伝わってきました。その一方、個々の先生方の授業に対する深い愛情も感じられた分科会でした。（文責：西本佳代）

■自然科学分科会

自然科学分科会では、「自然科学系教養教育のカリキュラム設計、授業改善、課題 ～専門教育とのつながりを意識して～」というテーマのもとで、特に山口大学と徳島大学における事例の報告と現状分析に基づく話題提供・問題提起が行われました。まず山口大学の事例では、創成科学研究科の朝日先生と川村先生から、一般教養としての自然科学をどのようにして、すべての学部で開講しているのかの事例紹介がありました。特に物理や化学などについて、同じ内容を文系向けと理系向けで開講する場合、科学史のような内容は共通とし、身の回りの物理・化学などは異なるレベルと内容にするなどの具体例を紹介してもらいました。また、高校生の1%しか地学が履修されておらず、そのような学生に対して、実験を通して地球科学に興味を持ってもらうための実験の取り組みの方法についての事例紹介がありました。一方徳島大学からは、教養教育院の斉藤先生と渡部先生から数学・物理・化学・生物・英語の各科目で行われている入学前学習の内容と効果、引き続き入学後に行われるプレースメントテストの実施と活用方法、さらにその結果をもとに行われるリメディアル教育についての事例紹介がありました。特に医学部では、高校時代に生物を履修せず、入試を物理と化学で受験した学生に対して、生物のリメディアル教育がその後の専門教育に重要であることが、分析結果とともに示されました。（文責：石井知彦）

■情報教育分科会

情報教育分科会のテーマは、「データサイエンス教育の教養課程での実施と専門教育への展開」でした。特に山口大学からの数理データサイエンス教育に関する 2 件の報告は、全国に先駆けて独自に検討を深めてきた、特筆すべき豊かな内容を持っており、これらの報告を中心に紹介します。

共通教育では、平成 30 年度から全学生を対象に開講している必修科目「データ科学と社会 I・II」について報告がありました。担当教員の専門性にかかわらず授業を実施できるよう、ビデオ教材を作成しています。「社会における課題発見・解決、価値の創出」の視点を重視し、地元の情報系企業や県警などからの協力を受けてコンテンツを作成しています。決定木など機械学習の仕組みを平易に解説する試みもしており、文系学生を含めて課題もこなしているとの報告がありました。

専門教育を含めた全学的展開では、「データサイエンス教育推進室」を整備し、「データサイエンティスト協会スキルチェックリスト」をベースに、全学部のデータサイエンス関連科目の実施状況を把握し、教育基準を作成しています。行動規範、論理的思考、統計数理等のスキルカテゴリのもと、一貫性をもってカリキュラムを改革しています。本学のデータサイエンス科目群を設計していく際にも、この方法は大いに学ぶべきものと感じました。(文責：寺尾 徹)



■外国語（英語）分科会

紙幅の都合で人文学部太田聡教授が説明された「共通教育英語科目の変遷と課題」について紹介します。

山口大学の全学共通科目英語は、特色 GP による TOEIC L&R テスト利用カリキュラムとして 2002 年から注目を集めてきました。これは 1 年生全員に TOEIC 受験を義務づけ、前期前半に全学共通の教科書を利用した TOEIC 指導を行う一方、高得点者はスコアによる単位の認定をするもので、香川大が 2005 年から TOEIC の義務化を行った際にモデルとした方法でもありました。

全国的に評価の高かった山口大方式でしたが、400 点未満の学生が続けなければならない e-learning が学生には苦しかったことや、統一教材による同一授業のマンネリ化の指摘もあり、2 単位増加で 4 技能を学ぶ新カリキュラム導入の経緯が説明されました。

2014 年度からの 2 年間は統一 TOEIC 教科書の利用を止め、e-learning の義務化もしなかったのに、TOEIC 平均スコアは下降せずむしろ上昇したこと、次に満を期して 2017 年から導入した e-learning 再義務化・4 技能化カリキュラムでは、学生の満足度は上昇したにもかかわらず

ならず TOEIC 平均スコアが上昇しなかったことなど、現場の先生方のご苦勞がデータとともに紹介され大変参考になりました。(文責：長井克己)

■外国語（初修）分科会

2013 年度に初修外国語を全学共通科目枠から外した山口大学の教員から現状と問題点について報告が有りました。

人文学部は必修のリテラシー科目として独仏中三か国語を設置、経済学部は学生が将来利用する可能性が高い中韓（授業名はハングル）、医学部が独仏中韓の科目を専門基礎の分類で置いています。このため、どの学部に進学するかで、学習できる外国語に大きな差があり、たとえば、独仏といった欧州大陸の言語は、人文学部か医学部に進学しない限り山口大学の学生は学習できない（他学部から受講できない）という状況が生まれています。

また現在学部改組中で完成年度までは基本的に専任教員が担当する科目しか置けなくなったため、1 クラスの人数が 70 名程度にまで大きくなり、またネイティブスピーカーによる教育も難しくなっています。また人文学部では初修外国語が必修の学部開設科目であるため、外国語科目担当教員が香川大学でいう CA の仕事を任され、1 年次学生の履修状況チェックやポートフォリオ作成などに時間が取られるということでした。

大学全体としては、初修外国語を共通教育枠から外すことで非常勤講師人件費の一定の削減効果があるのですが、この事は、例えば山口大学でも初修外国語で学習する言語の国への派遣留学生の減少につながっており、留学生の減少は将来的に海外大学との学術交流協定自体の存続に影響を与えます。この点は派遣留学生増加を目標に掲げている香川大学もよく認識しておかなければなりません。

なお、鳥取県立大学の参加者からは、初修というと独仏中韓とほぼ同義に見られているが、県立大ではインドネシア語、タイ語なども教えており、設置する外国語の範囲について考える時期ではないかという意見が表明されました。(文責：高橋明郎)

■日本語・日本事情分科会

今年度の本分科会の背景となる問題意識は、入学前に留学生の日本語能力の測定に用いられることの多い J-CAT の代替手段をどうするか、という点でした。同試験は現在はオンラインで無料で実施されていますが、2020 年度に有料化されることが決定しました。したがって、同試験に基づいてクラス編成を決定していた教育機関においては、代替手段は差し迫った課題となっています。「日本語のレベル指標の見直しとオンラインレベルチェックテストの開発について」(山口大学 宮永愛子准教授) は本件を正面から取り上げた発表でした。「J-CAT を利用したオンラインプレースメントテストの実施と運用」(広島大学 石原淳也准教授) は、規模の大きい教育機関における、同試験受験者の管理の困難さを扱っていました。「CEFR 「C2」 レベルが想定する人物像の妥当性—<新婚 Can-do>との比較から

考える」(山口大学 山本冨里准教授)では、試験や評価の話題において必ず言及される、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)についての見過ごされがちな視点が提起されました。「BJ-CAT ビジネス日本語テストの研究開発」(山口大学 赤木彌生非常勤講師・東亜大学 家根橋伸子教授)では、ビジネス日本語における評価ツールである、開発中のBJ-CATが紹介されました。(文責:高水 徹)

3. よりよい授業のためのFDワークショップ報告

日時：令和元年9月12日(木)～13日(金)

場所：休暇村讃岐五色台

第10回「よりよい授業のためのFDワークショップ」が、令和元年9月12日(木)～13日(金)の1泊2日で、休暇村讃岐五色台において開催されました。このワークショップは平成22年より毎年開催されており、本学大学教育基盤センターの教員が講師を務めています。今回の参加者は、16名(香川大学10名、高松大学2名、高松短期大学1名、香川県立保健医療大学1名、松山大学1名、聖カタリナ大学1名)でした。



ワークショップの目的は、授業を担当するにあたって必要となる基礎的な知識と技術を学ぶことでした。

具体的には、授業の構想・設計・実施・評価に関わる

一連の過程をグループ作業として体験し、参加者相互の話し合いを経てそれに関する能力を身につけるというものでした。

ワークショップのプログラムは主に、講義、グループワーク、そしてグループ発表で構

■プログラム概要 ※GW=グループワーク

1日目(研修は9:15～21:00)

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイキング
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・講義 III「よりよい学習評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・懇親会

2日目(研修は8:00～12:00)

- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表」
- ・閉会式

成されていました。ワークショップでは、4人ずつ4グループに分かれて全学共通科目の開発を行い、シラバスと授業計画案等を作成しました。中間発表では講義を担当した講師からコメントがあり、各グループはこれらのコメントをもとにシラバスと授業計画案を修正し、ミニ授業も含めた最終発表にのぞみました。最終発表では、パワーポイントだけでなく、映像なども使ったプレゼンが行われました。また、ワークショップを行った部屋の壁には参加者が事前に提出した、授業を行ううえでの質問等が掲示されており、講義やグループワークの内容等を考慮しながら講師がそれらの質問に対する回答を掲載していきましました。参加者は、これらの質問と回答を写真に撮るなどして、今後の教育につなげようとしていました。このように本ワークショップ

は、参加者同士や、講師と参加者のインタラクティブな学びの場になったのではないでしょうか。

ワークショップを開催するにあたり、講師を務めた大学教育基盤センターの教員の方々だけでなく、修学支援グループ職員の方々も準備や運営等を行ってくださり、ありがとうございました。来年度も、参加者の方々にとってワークショップが貴重な学びの場になることを願っております。

(文責・小坂有資)



4. FD スキルアップ講座報告

- 講座名：「大人数講義をもっとうまくやるためのコツ」
- 日 時：令和元年9月25日（水）13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

大学教育基盤センターの葛城浩一准教授による、FD スキルアップ講座「大人数講義をもっとうまくやるためのコツ」が開催されました。本講座では、ワークを行ったり、講義に対する学生の声を紹介したりしながら、大人数講義をもっとうまくやるためのコツを30個学ぶことができました。30個のコツは、次のような内容で分類されていました。それらの分類は、構成をしっかりと考える、明確に話す、匿名空間にしない、ペア／グループワークを挿入する、発問で刺激する、資料配布・回収やテストを効率的に行う、というものでした。これらのコツのうちいくつかは、受講者が実際に体験しながら、学



ぶことができました。さらに、教員と学生の双方向のコミュニケーションを行うためのクリッカーやコミュニケーションカード等の道具についても紹介され、これらも体験しながら学ぶことができました。（文責：小坂有資）

- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－話し合いの技法編－」
- 日 時：令和元年9月25日（水）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

大学教育基盤センターの葛城浩一准教授による、FD スキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング型授業－話し合いの技法編－」が開催されました。本講座では、「話し合いの技法」のうち、シンク・ペア・シェア、ラウンド・ロビン、トーキング・チップ、スリー・ステップインタビュー、バズ・グループを、体験を通じて学ぶことができました。さらにこの講座では、技法の紹介とそれらの体験だけではなく、技法を実践する際の留意点を授業の、準備段階、開始段階、中間段階、終了段階、事後段階に分けて説明がなされました。

このように本講座は、受講者同士や受講者と講師との、話し合いの技法を使ったコミュニケーションの機会を随所に取り入れた構成となっており、さらに技法を実践する際

の留意点も学ぶことできるので、よりよい授業をするために話し合いの技法を取り入れるイメージができました。(文責：小坂有資)

- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－教え合いの技法編－」
- 日 時：令和元年9月26日(木) 13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：佐藤慶太(大学教育基盤センター准教授)

大学教育基盤センターの佐藤慶太准教授による、FDスキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング－教え合いの技法編－」が開催されました。本講座では、①グループワークを利用したり、②佐藤先生ご自身による授業の事例を用いたりして、「教え合いの技法」が紹介されました。まず①については、グループでそれぞれの担当を決めて教え合う技法であるジグソー学習を使いながら、他の教え合いの技法(テスト・テイキング・チーム、ノート・テイキング・ペア、ロール・プレイ)を学ぶというグループワークが行われました。つぎに、②についてです。教え合いの技法であるジグソー、ラーニングセル、フィッシュボウルを使った授業の実践事例紹介が行われました。そこでは、教え合いの技法を使った授業を受講した学生の感想等も紹介されたため、それぞれの教え合いの技法の有効性や意義についても理解することができました。(文責：小坂有資)



- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－問題解決の技法編－」
- 日 時：令和元年9月26日(木) 14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：三宅岳史(教育学部准教授)

香川大学教育学部の三宅岳史准教授による、FDスキルアップ講座「始めよう！アクティブラーニング－問題解決の技法編－」が開催されました。本講座では、「問題解決の技法」として、タップス(Thinking-Aloud Pair Problem Solving)、センド・ア・プロブレム、ケース・スタディー、ストラクチャード・プロブレム・ソルビング、アナリティック・チーム、グループ・インベスティゲーションが紹介されました。特に、タップス、センド・ア・プロブレムは体験しながら学び、他の技法については三宅先生の実践例等も交えながら学ぶことができました。さらに、課題発見と課題解決との関係性や、三宅先生が授業に取り入れている課題発見法(「哲学カフェ」や「こども哲学」)についての説明があり、問題解決の

技法だけでなく課題発見や課題の立て方、問題発見もまた重要であるということを再確認することができました。(文責：小坂有資)

- 講座名：「事例から学ぶ問題発見・解決型授業のコツ」
- 日 時：令和元年9月26日(木) 16:20～17:50
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：小坂有資(大学教育基盤センター特命講師)

26日午後に行われた3つのスキルアップ講座の最後のものでしたが、9名の参加がありました(3つすべて受講された方が6名)。まず問題発見・解決型授業の定義とそれが求められる背景について説明がありました。続いて香川大学で実際に行われている授業(全学共通科目、主題B)の事例紹介を通じて、授業デザインのコツが示されました。実際に、香川大学で開講された授業が示されるので「主題Bで、こんなことができるのか!」という学び、刺激がありました。事例紹介後の活発な質疑から察するに、受講者もいろいろな刺激を受けたようです。これを踏まえて、受講者は残りの時間で、実際に授業計画案を作成するワークに取り組みました。最後のグループ内での計画案の共有の時間でも、熱心な話し合いが行われており、受講者はここでも学ぶところが多かったようです。(文責：佐藤慶太)

- 講座名：「始めよう!アクティブラーニング型授業—図解の技法編—」
- 日 時：令和元年9月27日(金) 13:00～14:30
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：ウィリアムズ厚子(大学教育基盤センター講師)

香川大学大学教育基盤センター講師のウィリアムズ厚子先生による、FDスキルアップ講座「始めよう!アクティブラーニング—図解の技法編—」が開催されました。例年、多くの参加者が訪れるこの講座ですが、今年は開講曜日を変更したためか、参加者が2名と少なくなっていました。ただ、その分とてもアットホームな雰囲気です。講座が進められました。例えば、大好きマップを使ったアイスブレイクで、参加者と講師との共通点を探



たり、参加者2人の共通点「甘いもの好き」を使って、「チーム・マトリックス」を作成してみたり。ウィリアムズ先生のアメリカの大学時代のお話やロシア旅行のお話もお聞きしながら、アクティブラーニング型授業の意味について考えました。ワークを入れると、どうしても時間がぎりぎりになってしまうのですが、ウ

ウィリアムズ先生の講義では時間がゆったりと流れます。ぜひ、多くの人にこの講座を体験していただきたいと思いましたが、講師の一人としては、こうした時間配分を学ばなければならぬなと思いました。（文責：西本佳代）

- 講座名：「始めよう！アクティブラーニング型授業－文章作成の技法編－」
- 日 時：令和元年9月27日（金）14:40～16:10
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

本講座である、アクティブラーニング型授業における「文章作成の技法」とは、学生が様々な要素を統合して首尾一貫した文章を書く力を身につけさせ、批判的思考力を育成するための実践的な方法について解説したものです。

まず、アイスブレイクを実際に体験しながら、その定義と意義が示されました。次に、アクティブラーニング型授業の「共同学習」とはどのようなものかについての具体的な説明の後、文章作成のための「ダイアログ・ジャーナル」、「ラウンド・テーブル」、「ダイアディック・エッセイ」、「ピア・エディティング」、「コラボラティブ・ライティング」、「チーム・アンソロジー」そして「ペーパー・セミナー」の7つの技法についての講義がありました。その中で「ダイアログ・エッセイ」、「ラウンド・テーブル」及び「ペーパー・セミナー」においては、受講者が自分の授業を振り返ったり、講義内容を今後の授業に反映させる指導案を書いたりしながら、実際にグループワークに取り組みました。また、「ディープ・アクティブラーニング」についても理論的な説明があり、受講者はアクティブラーニングについて体系的に学ぶことができました。（文責・ウィリアムズ厚子）



- 講座名：「初心者のためのクリッカー講座」
- 日 時：令和元年9月27日（金）16:20～17:50
- 場 所：幸町北キャンパス 423 講義室
- 講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

クリッカーとは、授業時に用いる教員と学生の双方向コミュニケーションのための教育機器のことです。学生の持つレスポンスガードと教員のパソコンを繋ぎ、回答結果などをリアルタイムに集計することができ、このツールを用いることで両者参加型の授業にする

ことができます。

本講座では、インストールの方法から始め、実際の授業で活用できるための基礎的な操作方法を学びます。同時にプライバシーやセキュリティーの問題にも触れ、心理的、法的な側面についても理解することができます。

最終的に、受講者は自分のパソコンを使って、質問事項を設定し、クリッカーを用いて他の受講者からの回答を集計することができました。スクリーンに現れるグラフなど、視覚的な補助も授業を活性化し、アクティブラーニング型の授業には非常に効果的なツールです。今後さらに多くの授業で利用されることが期待されます。(文責・ウィリアムズ厚子)

■今後のスキルアップ講座の予定

学生の学びを促すシラバスの書き方	1月6日(月) 10:30~12:00 幸町北キャンパス 423 講義室
基礎から学ぶ学習評価法	1月6日(月) 13:00~14:30 幸町北キャンパス 423 講義室
学生参加型授業の技法	1月6日(月) 14:40~16:10 幸町北キャンパス 423 講義室
シラバス・授業を改善しよう!	1月7日(火) 10:00~15:00 幸町北キャンパス 423 講義室
事例から学ぶ授業外学修促進のコツ	1月7日(火) 15:30~17:00 幸町北キャンパス 423 講義室
「アカデミック・スキル」をどう教えるか	3月3日(火) 13:00~15:10 幸町北キャンパス 423 講義室



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。